

都市と山村の交流でつくる森林

文・漆原次郎

三井 昭二 (三重大学名誉教授) みつい しょうじ

1948年(昭和23年)2月21日生まれ。日本の森林や林業の歴史に目を向け、林業や山村、森林のあり方を考えてきた。都市で暮らす人びとと林業を営む人びとの森林をめぐる交流のしかたを研究し、交流することの大切さを社会に向けて伝えてきた。



森林は山村に住む人びとにとってだけでなく、都市に住む人たちにとっても大切なものだ。森林を育てて木材を得る林業という営みを日本で続けていくことがおぼつかしくなり、山村から人が減っていくなかで、都市で暮らす人びとが林業や森林に対してできることは多くなってきている。

三井昭二さんは、日本の森林や林業の歴史を見ることで、未来の林業や森林の姿はどうあるべきかを見つけ出そうとしてきた。そのなかでは、都市で暮らす人びとと森林の近くで暮らす人びととの交流を深める“かけ橋”の役目も担ってきた。

林政学の研究室で「入会」を学ぶ

三井さんは、山口県の下関市で生まれ育った。海に囲まれた故郷で、子どものころは岩場や砂浜などの海辺でよく遊んでいたという。高校生のころになると、本を読むことに夢中になった。農業や農村について書かれた専門的な本も読んだ。

大学受験では東京大学に合格し、入学する。自分のいる場所を探して、進んだのが農学部
の林学科だった。林学は、森林や林業について学ぶ学問だ。

「私にとって進むところは林学科しかありませんでした。“仙人の世界”を求めるとはもっとも適していると思いました」と三井さんは振り返る。現実の世界から離れて、欲をもたずに生きる、まるで仙人のような人たちが集うところを求めて、林学科にたどり着いた。

1971年(昭和46年)、大学4年になると林学科の「林政学研究室」に入った。林政学は、森林と人のかかわり合いを問う学問の分野だ。「“仙人の世界”からは遠い学問でしたが、高校時代に読んでいた農業や農村についての本に通じていました」。

研究室の筒井迪夫先生からは、林業の歴史のほかに、「入会林野」というものの考えかたについて、一から学んだという。入会とは、そこで暮らす人びとが、昔からの「きまり」や「お

きて」などに従って、みんなで資源を使っていくことだ。そのようにして使われてきた森林や野原のことを入会林野という。「筒井先生は、よく『入会は林政の母である』とおっしゃっていました」。

林政学研究室で、三井さんは歴史を調べることを通して、森林と人間、また森林と環境のかかわりかたを研究しようと決め、歩みだした。



森林ボランティアのいぶき

大学院時代の三井さん(右)。筒井先生と、研究調査で訪れた長野県川上村役場の前で。

1982年(昭和57年)、三井さんは、大日本山林会という団体の運営する林業文献センターの資料室で仕事をするようになった。資料室は東京の赤坂にある三会堂ビルの地下にあり、太平洋戦争中の国内の森林や林業の状況が詳しくわかる資料などがたくさんあった。そのころ三井さんは、太平洋戦争のころに国が森林や木材の使いかたをとりしきった「木材統制」という制度がその後の時代にあたえた影響などについて研究をしていた。ここでは資料の整理などの仕事は多くなかったため、自分の研究に時間をあてることができた。「ほかでは手に入らない資料もあり、自分の研究を進めることができました」。

資料室に来るお客さんには、三井さんが尊敬するような人も多くいた。「大師匠」にあたる元東京大学教授で大日本山林会の会長もつとめた島田錦蔵先生、かつて林野庁につとめ当時は大日本山林会の常務理事だった萩野敏雄先生、元筑波大学教授で林業経済学を研究していた鈴木尚夫先生などなど。そうした先生たちから研究のためになる話も多く聞けたという。

もう一人、三井さんが資料室で出会ったのが内山節さんだった。内山さんは、哲学という学問分野の研究者だが、自然も研究テーマのひとつとし、みずからも群馬県の上野村という山村で暮らしている。大日本山林会が発行する『山林』という雑誌に記事を書いていた内山さんのことを三井さんは知っていたが、初対面だった。それなのに話がとてもよく合った。三井さんは、内山さんのやっている「森林フォーラム」という団体に「入ってみませんか」と誘われ、フォーラムのまとめ役の一人になった。

上野村での交流会に参加すると、都市で暮らす人びとが村で農業や林業を営む人びとと出会って、農業や林業を体験させてもらったり、お話を聞いたりしていた。都市の人びとは、森林の手入れや、農業や林業を営む人の手伝いを、ボランティア活動としておこなっている。お金をもらわないけれど、手伝いを通じて森林のみどりを味わったり、村の人びとと触れあったりといった喜びを得ることができる。三井さんは、森林をめぐってボランティアという新たな動きが現れていることを感じた。それからおよそ10年が過ぎた1997年(平成9年)では、日本での森林ボランティア団体の数は277だったが、その後、2011年(平成23年)には3152に増えた。どうして、活動がさかんになったのだろう。三井さんはこう考えている。

「都市の人びとの森林に対する関心が高まりました。それに、里山でレクリエーションも含めて楽しみながらボランティア活動をすることで、雑木林を再び活性化できるという思いが広

がりました。また、林業を手伝うボランティアには、いまの林業が苦しいので手助けをしたいという願いもあります」

かつて森林の近くで暮らす人びとは、森林で薪や炭、肥料、また山菜やきのこなどの食べものを得てきた。人びとのかかわりの深いこうした森林は「里山」とよばれる。ところが、1960年代ごろから、木炭や薪がガスや石油に代わり使われなくなったり、里山の近くで農業をする人そのものが減ったりして、里山に人があまり入らなくなった。いっぽう、林業についても、外国からの木材が使われるようになり、木を育てて木を売るということがおぼろしくなってきた。そうしたなかで、森林ボランティアの活動が新しい流れを生み出そうとしてきたのだ。



「森林フォーラム」による、都市の人びとと農家の人びとの交流。群馬県上野村にて。中央で話しているのが三井さん。その左が内山節さん。

林業の担い手は若返っている

1994年（平成6年）、三井さんは三重大学で研究をすることになった。林学を研究する生物資源学部の歴史は古く、1921年（大正10年）に開校した三重高等農林学校という学校までさかのぼれる。また、三重県には、古くから林業が営まれてきた森林も多くある。「尾鷲檜」は、静岡県の「天竜杉」、奈良県の「吉野杉」とともに「三大人工美林」とよばれている。

「落ち着いた環境で研究生活を味わうことができるようになりました」

林業を営む人たちと話をしたり、森林に実際に入ったりすることも多くなった。当時の三重県では、30歳代の若い人たちが林業を営みはじめていた。速水林業の速水亨さんや叶林業の堀内宏樹さんたちだ。三井さんは、そうした人たちが林業と環境のバランスを考えながら、さかんに市民との交流をつくらうとしているのを感じとった。県内の森林組合の学習会に参加したときには、若い人たちのなかに、林業の仕事につくため都市から地方に引っ越してきた「Iターン」の人や、地方から都市に出たけれど故郷に戻ってきた「Uターン」の人も活躍していることを知った。

三重大学で研究を始めた年から、三井さんは全国林業労働力育成センターという団体がおこなう林業の仕事につく人びとの実際の働き方などを調査するとりくみに参加した。全国の優れた林業の事例を詳しく見ていくと、全国的にも、新しく林業の仕事始めた人びとのなかに「Iターン」の人や「Uターン」の人が多くいることがわかった。彼らが、森林組合の運営や地域のスポーツ活動などをいきいきと率いている。

「林業を営んでいた人は、かつては必要以上に自信を失いすぎていました。ですが、自分たちの仕事に誇りをもつ人が現れるようになったのです」

林業では、1990年（平成2年）ごろから35歳未満の若い人の割合が増えはじめ、また、2005年（平成17年）ごろから65歳以上の高齢者の割合が減ってきている。林業の仕事につく人たちの若返りが始まっている。

三重大学に来るまでは、おもに森林に興味をもつ都市の人びとと接してきたが、三重大学に来てからは、林業を支える人びとと接することが多くなった。三井さんは、都市の人びとと林業の人びとの交流を促す“かけ橋”の役目を担うようにもなった。

「私自身、社会での役割を見つけられるようになりました。都市の人びととの交流で感じたことを携えて、森林へと入っていったところ、多くの林業の人たちが私の感覚を理解してくれました。ほとんど都市の生活しか知らなかった自分でも、やれることがあるんだと思えるようになりました」

昔からの入会に代わる「新しいコモンズ」

里山があたえてくれる恵みをみんなで利用する。でも、その恵みを枯れ果てさせてはならない。これが入会のしくみの基本だ。そんな知恵と慎みを、昔の人びとはもっていた。だが、日本では、暮らしのなかに里山を必要とする人が少なくなり、いまでは入会のしくみも崩れてしまっている。

「これからの未来を考えたとき、生産の規模を拡大しつづけていくことには限界が見えています。昔の人びとがおこなっていた、生産の規模を拡大せずにくりかえしていく営みから、いまの私たちが学べることはあるのではないのでしょうか」

三井さんは、過去の歴史を知ることにより、未来のあり方を見つけようとしてきた。崩れてしまった入会のしくみに代わって、三井さんが見出したのが「新しいコモンズ」のしくみだ。コモンズとは、みんなで使う資源のこと。新しいコモンズのしくみでは、都市の人びとと森林の近くの人びとがいっしょになって森林の使い方などを考え、ルールを決めることが大切となる。

「昔からの入会は、その里山にかかわる人たちだけの“閉じたもの”でした。これからの入会は“開かれたもの”であることも必要ではないのでしょうか。“開かれること”によって、都市の人びと山村の人びととの交流のなかから、“新しい道”が見つかるかもしれません」

三井さんは2012年（平成24年）に三重大学を定年退職し、いまは東京で家族とともに暮らしながら、1年に何度か三重大学で授業をしたり、自宅で研究を続けたりしている。

「若い人たちによる研究の発展が、都市と山村の交流、それに林業と山村の再生に生かされていくことを期待しています。若い人たちにとって、私の歩んだ研究人生が、励みになれば、うれしく思います」

次の世代を担う若い人たちがいま、森林に興味をもち、森林に入りはじめている。この新たな変化の芽生えを、三井さんは感じとっている。



未来を担う若い子どもたちが森林に触れあう。NPO 法人「森林の風」による森林作業についての入門研修のようす。2006年。三重県鈴鹿市にて。